



不死王は
スローライフを
希望します

FUSHIOWA SLOW LIFE WO
KIBOU SHIMASU

7

小狐丸

Kogitsunemaru

ill. 高瀬コウ



登場人物紹介

MAIN CHARACTERS

レオニダス

獣王国を統べる獅子王。
平和な時代が訪れたことで、
戦いに飢えている。

ボルクス

ミルとララの父親で、
エルフの冒険者。
シグムンドから与えられた武器で
トップパーティーに成り上がった。

ポーラ

難民の少女。
シグムンドが作った
孤児院に保護されている。

ララ

エルフの少女。
いつも姉のミルと
一緒に遊んでいる。
本名はララーナ。

ミル

エルフの少女。
母・ルノーラと共に
シグムンドに保護されている。
本名はミルアー。

シグムンド

本編の主人公。
最底辺の魔物・ゴーストから、
最強の吸血鬼・
不死王に進化する。
スローライフを志す。

リーファ

シグムンドの眷属でありメイド。
魔族として高い戦闘能力を持つ。

一話 ついもの口亭

最弱の魔物ゴーストから、この世界最強の存在である特殊なバンパイアロードであるエレボロスロードにまで進化し成り上がった俺——シグムンド。

深淵しんえんの森しんに続いて、俺は草原地帯にも城塞都市じょうさいとという確固とした拠点きょてんを築いた。

加えて、草原地帯の入り口付近に竜人族りゅうしんぞくの拠点を造ったのだが……懲りないジラッド聖国が攻め寄せてきたんだ。

まあ、余裕で返り討ちにしたんだけどな。

だいたい、俺が造った眷属けんぞくである、スバルトイのドンナーとベルク。マザーキラープランツとその子たち、イモータルトレントとアイアンゴーレムの鉄男てつおと鉄次てつじが守る竜人族の拠点を攻めるなんて、魔王国でも難しいのだ。

ジラッド聖国じらだつせいこくごときにかできるものじゃない。

それに守られる立場を良しとしない竜人族の人たちが、ドンナーやベルクに頼み込んで訓練し始めたらしいからな。

もともと魔王国でも高い戦闘能力を持つと言われていた竜人族だ。

今後、それなりに強くなるのかな？

俺としても古竜の老である黄金竜のオオ爺サマから属性竜と呼ばれる竜種の素材を分けてもらい、ドンナーとベルクを造れたのは楽しかった。

だから、面倒はあつたけど良いことの方が大きかったかな。

それに住民からの願いで開催してみた城塞都市とその周辺の農地の収穫祭も、初めてにしては大成功と言っているのかな。

俺的には、ちよつとしたお祭りや夜店って感じだったけど、結果的にみんなが喜んでたみたいだから良かった。

良いことも面倒なこともいろいろとなきゃかんやあつたが、今日も草原地帯は平和だ。

そんな収穫祭を終えた草原地帯だけど、草原地帯入り口に竜人族の集落ができた影響が、ぼちぼち始めている。

「商人？」

「はい。ローズ商会のバーバラ殿のように、フットワーク軽く、それこそ赤字覚悟で訪れるガッツある者が、ポツポツと始めています」

俺の眷属であり執事のセプールからそんな報告があつたのだ。

その隣には、セプールの孫娘で同じく眷属であるリーファもいる。

ローズ商会のバーバラって女は、以前城塞都市に商売しにやってきた商会の会頭だ。

いろいろと思惑があつたみたいだけど、結果的に害になる程じゃなさそうなので放置していたんだよな。

俺としても、盗賊紛いの護衛を連れてくるくらいなら、何の問題もない。

孤児院の子供たちのいい訓練相手になるしな。

今までは主に魔王国と交易していたが、他の西方諸国から商人が来るのは歓迎したい。

竜人族の集落を造ることになった大きな理由の一つが、城塞都市と竜人族との交易だ。

俺たちと建設的に話を進めていた竜人族や冒険者ギルドと、そこに割って入ろうとして締め出された商業ギルドは揉めているからな。

商業ギルドの顔をつぶす形になるから、表立って大商会は来にくい。

バーバラって女は、聖国や商業ギルドを上手く転がして、草原地帯で利を得ようとしたみたいだがな。

「商人かあ。竜人族の集落までなら来させても問題は起こらないよな」

「はい。あそこにはスパルトイのベルクとドンナーに加え、アイアンゴーレムの鉄男と鉄次もいます。余程のバカでも悪さはしないかと」

「だよなあ。マザーキラープランツとイモータルレントも何気に迫力があるしな」

「はい。ただ、竜人族の集落で、ある程度ふるいにかけるようにできればいいのですが。商人の目

的地はここですから」

草原地帯が栄えると、必然的に人の流入が多くなることは避けられない。

そしてセブルが言うように、商人が用があるのは、合同買取所があるここ——城塞都市だ。

まあ、どうしても俺が嫌なら排除も可能だけど、そこまで傲慢じゃない。

現状の治安維持についてだが、教会や孤児院のあることは、俺の眷属であるウッドゴーレムやアイアンゴーレムが守っている。

加えて、伝説の黄金竜のオオ爺サマやその眷属であり、属性竜の遺したアイテムを使って生み出された竜人ギータやグラスたちが気にかけてくれている。

フラフラとどこにいいのか分からない、本当に風任せのようなゲイルは別にして、他の三人の竜人は頼りになるからな。

彼らと比べると少し頼りないが、魔王国の兵士も頑張っている。

それに孤児院の子供たちにもパワーレベリングを施して、外からの悪意に打ち勝つ態勢は考えているつもりだ。

とはいえ、そこまでしても万全とは言い難い。

赤ちゃんにまでは、パワーレベリングをするのは無理だからな。

「今のところ魔王国みたいにキャラバンを組んで大人数で来る商会はいないが、それでも護衛なんかを含めたらそれなりの数だよな」

「わざとでしょうが、ローズ商会の護衛も質の良くないものが交ざっていました」

「こんな辺境に護衛依頼で来る冒険者だからな。ローズ商会は別にしても、そりゃまともじゃないのも交ざるか」

ローズ商会が連れてきた護衛の中にいた、質の良くない冒険者。

まあ、俺もアレはわざとなのは分かっている。

大方、城塞都市の戦力を試したのだろう。

で、この冒険者というより盗賊と言った方がしっくりくる奴らは、商会の期待通りにやらかさうとし、きつちりと子供たちの撃退訓練のモルモットになってくれた。

しかもこれまたラッキーなことに、ジーラッド聖国が懲りもせず、草原地帯入り口付近に造られた竜人族の集落に侵攻してきてくれた。

竜人族の集落とは言うものの、その堅固な造りは岩並み。

しかも中の戦力は、ジーラッド聖国ごときが総力で攻めてきても蹴散らせるレベル。

当然のように被害ゼロで撃退。

竜人族の若者たちの良い実戦経験にもなった。

「旦那様、ここはダーヴィッド殿下や教会のロダン殿を含めて、相談してはいかがでしょうか？」

「それもそうだな。俺たちは森が拠点だし、ここに暮らす人たちと話し合うのが一番か」

確かに、城塞都市で実際に暮らしているロダン司祭や、魔王国からここに派遣されている、魔王

国の第二王子で、魔王国の駐屯地ちゆうとんちの責任者であるダーヴィッド君を交えて話し合ってみるのもいいかもしれない。

この地の治安維持に関わる話だしな。

ロダンさんやダーヴィッドはもちろん、孤児院を任せていて、この場所を造った当初からいる古参のシスター、アーシアさんやメルティーさんにも話を聞きたい。

「リーファ、ロダンさんたちのスケジュールの確認をお願いできる？」

「承知しました。旦那様」

「では、ダーヴィッド殿下の方は私にお任せください」

「ああ、頼むよ」

リーファに教会のロダンさんたちの都合を聞いてもらうよう頼むと、セプールはダーヴィッド君の方を引き受けてくれた。

人が増えて賑やかになるのはいいことだけど、いらぬバカも増えるからな。

こればかりは仕方ない。

ここに住む人にとっては、プラスの方が大きいんだから。

二話 今後の草原地帯

日を改めて、俺は城塞都市に来ている。

俺が預かっているエルフの子供たち——ミルとララは、いつものごとく孤児院の友達ポーラちゃんのところだ。

草原地帯の城塞都市……そろそろ名前を付けた方がいいと各所から言われているから、今度考えておこう。

その城塞都市にある城というか、政庁せいちょうというのか、中央に造られた建物の一室に俺とセプール、ロダンさんとアーシアさん、ダーヴィッド君が集まっている。

「今日はごめんね。集まってもらって」

「いえいえ。この街の治安については、孤児院を預かる身としては他人事ひとごとではありませんから」

「そうだな。実際に何度かトラブルも起きている。今後、そういった事例は増えることはあってもなくなることはないだろう」

俺がテーブルについたメンバーに声を掛けると、アーシアさんとロダンさんも人の増える問題点は無視できないと言ってくれた。

孤児院は襲撃されているし、公園で遊ぶ子供も攫われかけた。

ロダンさんとアーシアさんにとってはそのままでは済まされない問題だ。

「魔王国と草原地帯の間の街道整備が進んだことで、この城塞都市を訪れる商人も増え続けていくだろうしな」

俺がそう言うのとセブルが頷いて続ける。

「魔王国のキャラバンが行き来するお陰で、街道が通る途中の三カ国もうるおい始めているようです」

「オイフェス王国、ウルル王国、ゴダル王国ですね。魔王国からも街道の整備は各国にお願いしていますし、資金や物資の援助もしていますから」

ダーヴィッド君がそう補足してくれた。

魔王国から草原地帯へと、大陸の中央付近を南北に走る一本の街道。

本来なら、その整備に他国である魔王国が干渉するなど無理な話だ。

ただ、先代魔王が引き起こした大陸規模の大戦後、復興途中の三カ国は、国としての見栄より実利をとつたらしい。

ダーヴィッド君が言うように、魔王国の協力もあり、南北に走る草原地帯との街道整備が急ピッチで進んでいる。

魔王国としても、キャラバンも行き来する道が整っていた方がありがたい。

多少の労力や資金も喜んで出すだろう。

それに伴い、草原地帯との交易で一旗揚げたい商人が増えるのは自然なことだ。

「治安維持のために、駐屯している我が国の兵士を増やしますか？ 父上や宰相も許可すると思いません」

「いや、魔王国だけに負担を強いるのはどうだろう」

「そうですね。多少の増員は助かりますが、この街はあくまで旦那様が造られたものです。魔王国の兵士に治安維持を任せきりにするのは違いますね」

ダーヴィッド君の申し出もありがたいが、俺とセブル的にはそれは少し違う。

この城塞都市は、俺の偽善で孤児院を造りたいがために建設した場所だ。

その後、魔王国との交易や移民やなんやらで、住民も増え、人の行き来も増えたが、この場所に関する責任者が俺なのは間違いない。

今はオオ爺サマたち古竜のお陰もあり、俺がいなくても深淵の森から魔物が近寄ることもほぼない。

だけど、そもそも俺がいなきや強大な魔物ばかりで、人が住める場所としては成り立たない土地だったわけだからな。

俺たちでも何か考えた方がいいだろう。

「治安維持に兵士を多少増やすのはいいでしょう。商人の護衛がこの街に多く出入りするの、子

供たちを預かる身としては不安ですのぞ」

「アーシアの言うように、孤児院に来て日の浅い子供が攫われたばかりですからね。シグムンド殿たちのお陰で何事もなかったとはいえ、あの時は私たちもヒヤリとしました」

「そうだよなあ」

孤児院に来たばかりで、未だパワーレベリングをしていなかった子供が攫われた時のことを思い出す。

ミルやララ、ポーラが、従魔であるシロやクロ、マロンに乗って追いかけたんだよな。

セプールや俺がいたから万が一もないんだけど、何度も同じようなことがあるのは面白くない。

「とはいえ草原地帯の入り口付近に造った竜人族の集落のように、一目で過剰だと分かるほどの戦力を置くのも、この街や外の農地に住む住民がストレスを感じるでしょう」

「まあ、あれは竜人族の集落だからありなやつだな」

二体の威圧感たっぷりなスパルトイに、アイアンゴレム、そこにイモータルトレントときて、ダメ押しのパワーレベリングを従えるマザーキラープランツだ。

脳筋な竜人族だからすんなり受け入れている。

深淵の森でパワーレベリングする孤児院の子供たちなら大丈夫だろう。

だが、外の農地の子供や、これから増えるだろう城塞都市内で暮らす人たちにとつては、確かにストレスかもしれない。

「そこでどうでしょう。竜人族の集落とこの街の間に、冒険者が宿泊する用の小さな街を造るのほ？」

そこでセプールが一つ提案してきた。

なるほど、主に商人が連れてきた冒険者用の街か。

それにはダーヴィッド君も賛成する。

「……いいんじゃないでしょうか。冒険者は野営に慣れていきますから、それほど豪華な宿は必要ありませんし。それこそ外壁で囲われた広場でも十分です」

「それ、いいな。冒険者はまとめてしまえば面倒も減るか」

「竜人族の集落でふるいにかけて、城塞都市に受け入れる商人と冒険者を分けるのですね」

「竜人族には申し訳ないですが、私もその案に賛成です。子供たちと接触が少なくなる方が安心です」

ロダンさんとアーシアさんのにも冒険者がこの街に増えるのは嫌みたいだな。

「街を造る旦那様と、不良冒険者をチェックする竜人族の皆さまには手間をかけますが、新たに街を設けるのが最善の策ではないでしょうか？」

「魔王国としても街の建設に協力します。そうすれば、駐屯の兵士を増やしても西方諸国から文句も出づらいでしようし」

セプールが俺と竜人族の負担を指摘するが、俺としては街一つ造るくらいなんでもない。

竜人族の集落にいるメンバーも、若くて戦える者が中心だから、何か事が起こっても負担は少ないだろう。

ダーヴィッド君としても、俺が造った城塞都市に、多くの兵士を駐屯させようという問題があった。

けれども、街の建設に協力することになれば、新たに兵士を増やしやすくなる。

まあ、それでも文句を言う国はあるんだけどな。

ジールラッド聖国とか。ジールラッド聖国とか。ジールラッド聖国とか。

ダーヴィッド君もバカな不良冒険者や、西方諸国から流れてきたテロリストを見てきたから、魔王国として何かできないか考えてくれていたんだろう。

この機会に少しでも駐屯する兵士を増やせればと思っただろうな。

魔王国の兵士はバカなことはいない。

それに、魔王国からここに来る人間は、俺の実力をちゃんと知っているから、下手なことはしようとも思わないだろうな。

「とはいえ、宿屋や消耗品を補充する店は必要だな。それをどうするか」

「そこは冒険者ギルドとも相談してはどうだろう」

街を造るのは片手間でもできる簡単な仕事だ。

だけど、その街の運営をどうするかが問題になる。

その点を踏まえて俺が言うと、ロダンさんがアドバイスしてくれた。

「ロダンさん。冒険者ギルドですか？」

「ええ。素行の悪くない引退周辺の冒険者をスカウトするって手もあります」

「なるほど。真面目な冒険者のセカンドキャリアですか。いいかもしれないですね」

「いいのではないのでしょうか。引退後、遊んで暮らせる超一流は別にして、引退後も働きたい者は多いはずですよ」

「はい。それに半端な不良冒険者にも負けないでしょうし」

ロダンさんが言うように、そこそ腕のあるベテラン冒険者の引退後の仕事として、宿屋や雑貨屋の店主は悪くないかもしれない。

ある程度の相手なら対応できそうだしな。

「なら僕の方で冒険者ギルドのマスターと面談のアポを取っておきます」

「じゃあそっちはダーヴィッド君に任せようかな。場所は竜人族の集落とこのちょうど中間地点でいい？」

細かいあれこれはダーヴィッド君に任せよう。

俺は街の建設だな。

そう思って、実際に冒険者の街を造る場所を確認しておく。

「それで問題ないかと。ここからでも目視可能な距離です。最低限の護衛で行けますね」

「もはや護衛なんて必要ないくらいですな」

「はい。この付近はアスラさんのお陰もあって、森から魔物が出て来ることはなくなりましたから」

セブルとロダンさん、アジアさんが集落と城塞都市の中間地点で問題ないと頷く。

アジアさんが言うように、この付近は俺やオオ爺サマの影響だけじゃなく、俺の眷属であるグレートタイラントアシュラベアのアスラが定期的に巡回警備している。

深淵の森でも上澄みであるアスラの気配は魔物除けになる。

そして、それが分らないバカな魔物は、直接アスラの実力行使により駆除される。

結果、最近じゃ草原地帯の入り口付近から城塞都市までなら、護衛も必要なくなってきたくらいだ。

「必要な宿の数と大きさ、その他の建物の数と大きさも教えてくれるかな」

「……宿は少し高級なものを一軒と、安宿の大きめなものを一軒で大丈夫でしょう」

俺の問いにセブルが答えてくれた。

「それもそうか。無制限に商人を受け入れるわけじゃないしな」

「はい。商業ギルドとは敵対していますから」

確かに、商人が増えると言っても、深淵の森の素材の窓口は、合同買取所を運営する魔王国と冒険者ギルド、錬金術師ギルドに薬師ギルドだ。

繰り返しにはなるが、現状商業ギルドとは険悪な関係で、ハブったような状態だからな。

なので、おおつびらに草原地帯に進出できる大商会はなく、当面、個人の小さな商会か中堅の商会が来るくらいだと思っている。

商会としてそこその規模のローズ商会も、わきまえていたからか、大規模な商隊を組んでくるなんてことはしなかった。

「大規模なキャラバン組んでこられても叩き返すしな」

「ええ。小規模な取り引きだけ、合同買取所に限って認めているわけですしね」

俺が言うと、セブルも頷いた。

「竜人族の集落を抜ける時に、チェックする関所でも設けるか」

「魔王国内の竜人族の集落も、少しでも多くの人員を送りたいでしょうし、役目が増えるのは喜ぶのではないのでしょうか」

「シグムンド殿。一度、冒険者ギルドや錬金術師ギルド、薬師ギルドと竜人族の方々も含め会合の場を設けませんか。錬金術師ギルドや薬師ギルドも、冒険者向けの街ならポーション類の販売を考えるかもしれません」

ダーヴィッド君の提案はもともとだとセブルと二人で頷く。

「そうだな。造る前に話しておく方がいいか」

「ですな」

竜人族の集落の中に関所を設置するなら、竜人族に話を通すのは当たり前だ。それに、新しく冒険者の街を造るとなれば、冒険者ギルドは当然として、錬金術師や薬師の需要も出てくるだろう。

「なら竜人族の集落とこの街の間に、冒険者用の街を造るのは決定として、細かな縄張りや施設の数と大きさなんかは、竜人族の長老や、商業ギルドを除いた各ギルドとの話し合い後って感じだな」

「ええ、それで大丈夫でしょう。もしかすると冒険者用の街にも教会をと、教会本部あたりが言い出すかもしれません」

ロダンさんは、そう言つて眉間に皺を寄せる。

「ああ、流石に竜を信仰する竜人族の集落の方に教会を設置するのは無理だもんな」

「はい」

「まあ、そのあたりは今はどうちでもいいか」

もう俺としては深淵の森を含めた草原地帯も責任を持つと決めたからな。

どっちにしても、誰かの好き勝手にはさせない。

とりあえず詳細を詰めるために、もう一度会合の場を設けることに決まった。

さて、セブルとリーファを連れて現地の視察でもしておくか。

地下の水脈の確認は必須だからな。

三話 役割分担

冒険者ギルドや錬金術師ギルド、薬師ギルドの責任者が集まる日程は、思ったよりも早く決まった。

これは合同買取所の設立に合わせ、草原地帯の城塞都市……もう、いい加減名前を付けるか。

そうだな。【アウロラ】にしよう。

深い意味はない。

こんなのはフィーリングが大事だからな。

名前についてはすぐに各所に伝達しておこう。

で、各ギルドの責任者が思ったよりも早く集まることができたのは、アウロラの合同買取所の立ち上げのために来ていたからだ。

だからあとは竜人族の長老を呼べばその日のうちに会合することもできたんだが、流石にもう少し日にちが欲しいと責任者たちにお願ひされた。

まあ、それぞれ要望をまとめるのに時間は必要だな。

ちなみにだが、冒険者ギルドの支部長グランツは、合同買取所の設立からずっとアウロラにいる。

それだけここが重要な地だと冒険者ギルドとしては考えているんだろう。

その後、それほど日をあけず話し合いは行われた。

メンバーは、前回から続いて俺とセプール、ダーヴィッド君に、教会からロダンさんとアーシアさん。

それに加えて、竜人族の長老、冒険者ギルドの支部長グランツ、錬金術師ギルドと薬師ギルドの人。

名前は知らん。

なぜか、まるで氷像ひようぞうになったみたいに固まっている。

俺やセプールの存在の格を感じたのか。

いや多分、今日は追加で、火竜かりゅうの竜人ギータと氷竜ひようりゅうの竜人グラーズの二人も参加しているからだな。

俺やセプールは、普段は魔力や気配けはいを消すか、一般人並みに誤魔化ごまかしているが、彼女たちはそれをしていない。

ギータとグラーズは元が竜だからな。

しかも、魔王国に暮らす竜人族とは格が違う竜人族の始祖しそだ。

そもそも竜人族っていうのは、オオ爺サマが生み出した眷属を祖先とする一族らしい。

だから、その祖先と同じ方法で生み出されたギータたちを、竜人族は崇あがめているわけだな。

ギルド長たちは、そんな竜人の存在感にビビっているんだろ。

「では、みなさん揃そろわれたようなので、僭越せんえつながら私ダーヴィッドが進行しんこうを務とめます」

みんなが席に着いた時点で、ダーヴィッド君が話し合いの開始を告げる。

「事前にこの会合の議題はお知らせしていると思いますが、合同買取所の設立に伴うここ——アウロラが被かぶるデメリットをいかに少なくするかです」

「ああ、あの冒険者崩れの件は申し訳ない。冒険者ギルドとしても責任を感じている」

ダーヴィッド君が今日の議題をざっくりと言うと、冒険者ギルドの支部長グランツが頭を下げて謝罪した。

ローズ商會が連れてきていた、盗賊と呼んでもいい不良冒険者。

あいつらが暴れた件だな。

まあ、俺たちのには、グランツに思うところはなかったりする。

止めようと思えば、奴らが動く前に止められたからな。

「支部長が謝罪したように、商人が増えると護衛の冒険者も当然増えます。今のままなら孤児院の子供だけじゃなく、農地で働く者たちの子供にも危険は及びます」

「ここ以外じゃ、子供だけで遊ぶ光景なんざあり得ないが、生き生きと遊ぶ子たちの姿こそアウロラの街だからな。初めて見た時は信じられなかったぜ」

ダーヴィッド君が子供たちに危険が及ぶ確率が上がる懸念を示すと、グランツが続ける。

ここにきて、子供たちだけで自由に遊べる治安のよさに驚いたようだ。

「当然じゃ。ここは森神様と古竜様方がおわす地。人攫いなど許してはならんぞ！」

それに対して、竜人族の長老が当たり前だと声を上げた。

いや、オオ爺サマたち古竜を信仰する竜人族だから興奮するのも分かるけど、そこにサラツと森神様なんてワードを入れないでほしい。

彼らが俺のことをそう言い始めたせいで、最近広まりつつあるんだよな。

「まあまあ、長老も落ち着いて。それで治安の維持を考え、竜人族の集落からアウロラまでの間に、護衛の冒険者が宿泊する宿などを集めた小さな街……いえ、村ですかね。それを造ろうということになりました。ここまではいいですね」

「おう。冒険者ギルドとしてはありがたい。ギルドの支部を設けることが出来るからな。流石にアウロラには支部は置けない。この合同買取所は、基本的に冒険者が素材を持ち込む場所じゃないからな」

この合同買取所に森の素材を持ち込むのは、普通の冒険者じゃ無理だ。

普通の冒険者からすると、魔物たちが強力すぎるからな。

だから持ち込まれる素材は、基本的に俺とその眷属たち、そして子供たちのパワーレベリングの副産物になる。

「錬金術師ギルドとしては、アウロラに工房を設置できましたので、それを販売する店があれば問題ありません」

「薬師ギルドも同じくです。ただ、深淵の森産の薬草を使いたい薬師が、工房を持ちたいと要望しているのですが、今のところ全て断っています」

「それは錬金術師ギルドも同様ですな。アウロラに工房をという要望は多いのですが、現状では難しいですから」

「まあ、個人の錬金術師や薬師の工房は無理ですね」

錬金術師ギルドと薬師ギルドは、冒険者用の街に店ができれば、そこでポーション類を販売したいとのこと。

ただ、どちらのギルドも個人からの要望については断っているらしい。

ダーヴィッド君としても許可するのは難しいと考えているようだ。

確かにそこまで認める義理もないか。

そのうちアウロラ育ちの子供が成長し、錬金術師や薬師となって、この街で工房や店を出すようになればいいな。

「そうになると、冒険者ギルドの支部とポーション類を販売する店舗。それと高級路線の宿と低価格帯の宿。これくらいですか」

「希望を言えば、鍛冶師の工房もあった方がいいんだがな」

「それって冒険者ギルドで誘致可能ですか？」
「手配してみる」

ダーヴィッド君が必要な施設を数えていると、グランツ支部長がリクエストした。確かに、武器や防具の販売ももちろんだけど、補修などの手入れは必要になる。

実はアウロラには、農具や日用品を作る鍛冶師の工房はあるが、冒険者向けの武器を専門とする鍛冶師はいない。

そもそも冒険者が頻繁に訪れるようになったのは最近だからな。

まあ、アウロラの街自体を造ったのが最近とも言う。

冒険者用の街……いや大きき的には集落や村か。

そんな場所なら娯楽の場も必要になるのかな。

「ちなみにグランツさん、酒場とかって必要？ あと遊廓とか。できればこの街のすぐ側に、あんまり子供の風紀上よろしくない施設を置くのは勘弁してほしいと思ってるんだけど」

「森神様。多くの冒険者は酒と女は欲しいと思うだろうが、そんなものは草原地帯から戻ったあとで好き勝手遊べばいい話だ。飲食店で多少酒を提供するくらいは問題ないと思うが、そのあたりは森神様の方針に従うさ」

冒険者と言えば、酒、女、博打ってイメージだったから聞いてみたが、俺の方針に従うと言ってくれた。

俺としては、子供たちが行き来する可能性があるすぐ側の村に娯楽街を置くなんて抵抗がある。

「セプールはどう思う？」

「飲食店でお酒を提供するのはまったく問題ないと思います。お酒を主に提供する酒場も、トラップは多少許容するならアリかと。ただ、遊廓は必要ありませんね。冒険者用の村の治安が悪化します」

「そうだな。なら酒場は一応オツケーってことで。ただし、あんまり調子に乗るバカが出てくるようなら、俺かセプールが出張るからな」

犯罪の温床になるようなら俺もセプールも排除するのに躊躇しない。

迷わず潰すと宣言しておく。

ダーヴィッド君やグランツ支部長の顔が真っ青になり、コクコクと首を縦に振っているけど、俺は二人を脅したわけじゃないからね。

そこで竜人族の長老が手を挙げた。

「森神様。その冒険者用の村は、ワシらの集落のように高い外壁になるののか？」

「いや。アウロラも近いし、魔物の心配もほぼないと思うから、あそこまでの外壁にはしない予定だよ」

俺は長老の質問に答えた。

竜人族の集落は、西方諸国から草原地帯を守る意味合いもあるから、あの強固な外壁にした。

一方で、冒険者用の村はアウロラも近いし、簡単な外壁で十分だと思う。

「心配なのは内側ということですね。なら、竜人族から治安維持の兵士を派遣しますので、駐屯する建物をお願いできますかの？」

「おお。それはありがたい。竜人族が治安維持を手伝ってくれるなら、喜んで建物を用意するよ。長老、お願いできる？」

「もちろんですよ。あとできれば古竜様を祀るお社を建てる場所をいただければ。お社はワシらで建立します」

「それくらい全然大丈夫だよ」

そんなこんなで、竜人族の兵士を治安維持の人員として派遣してくれることになった。

この地に来ている竜人族は、オオ爺サマのお膝元で悪さなど死んでもしない。

だから、安心して警備や巡回を頼めるんだ。

そういう理由もあり、できれば竜人族にもお願いしたいと思っていたところで向こうから言ってくれたから、二つ返事でお願したよ。

拠点にする建物なんて、いくらでも建てろよ。

「それと森神様。その冒険者用の村には、ワシらの集落と同じような眷属様を配置されるのですか？」

「あゝ、それなあ。多分、衛兵代わりにゴーレムを数体派遣するくらいかな」

長老が言う俺の眷属とは、スパルトイのドンナーとベルクやアイアンゴーレムの鉄男と鉄次、あとマザーキラープランツやイモータルトレントのことだな。

流石にそれは過剰戦力が過ぎる。

威圧と、問題が起きた時に制圧できるようゴーレムを数体派遣するにとどめるつもりだ。

「私たちからも少しいたらうか」

そこでギータが声を上げる。

「おお！ ギータ様！」

「うん、何か意見があるのか？」

竜人族の長老の一人が興奮しているが、そこは放置しておこう。

「アウロラの子供たちの安全は私たちの願いでもあります。そこで、竜人族の集落か冒険者用の村のどちらかで犯罪者をチェックして、アウロラに入れないようにする工夫はできないでしょうか？」

「そういったチェック用の魔道具があればトラブルも減ると思うのですが」

ギータとグラスが言っているのは、よくファンタジー物のラノベに出てくるやつだな。

街に入る時に犯罪歴なんかをチェックする魔道具。

「ギータ様とグラス様でしたか。確かに冒険者ギルドが発行するギルドカードには、犯罪歴が書き込まれる機能はある。しかし軽犯罪で捕まった奴のカードに、ギルドが魔道具で書き込む仕組みだから……」

グランツがそう説明した。

「なるほど。でもないよりはマシ程度の効果はありそうですね」

「分かった。竜人族の集落か冒険者用の村に設置しよう」

「お願いします」

一応冒険者ギルドの会員カードには、犯罪歴を記すシステムがあるらしい。ただ、捕まった者しか対象にならない。それも軽犯罪のみだ。

この世界では重い罪を犯した者は、よくて鉱山送り。

それ以外は死罪らしいからな。

カードに犯罪歴が残るのは、軽犯罪者のみになる。

とはいえギータが言うように、ないよりマシだな。

もう前世の記憶なんて遙か昔のことだけど、ラノベの設定で街に入る時、手をかざすと犯罪者は赤くなったりする水晶なんかがあった。

あんなのマジもんの神様くらいにしかできない芸当だ。

当然、この世界にはそんな便利な道具は存在しない。

とはいえ、軽犯罪といえどもチェックできるなら有用だろう。

ギータやグラーズは、子供たちの守護者みたいな存在でもあるからな。

オオ爺サマも子供たちを見守ってくれている。

バカな犯罪者がアウロラに来るのが面白くないのは当たり前だ。

その後、とりあえず建てるものをリストアップし、井戸をいくつ掘るかなどの細かな部分を話し合う。

「森神様。我らの集落のように水の宝珠は設置せぬのですか？」

「宝珠って、湧水の魔道具のことか。流石にあれば盗賊ホイホイが過ぎるだろう。盗めないよう结界を張ればいいだけの話ではあるけど……」

「そうですね。あの湧水の魔道具に使われている水の魔石。あれを見れば、そんな気のない者も犯罪に走りそうではありますな」

セブルも言う通りだ。

冒険者用の村に湧水の魔道具は必要ないな。

「長老。冒険者用の村は農業をするわけじゃないからな。井戸があれば十分だよ」

「そうでしたか。では灯りの魔道具など、森神様がいろいろと下さった魔道具は？」

「ああ、それなあ。ダーヴィッド君はどう思う？」

このアウロラには、俺が作った魔道具が溢れている。

それは外の農地に住む人たちの家も同様だ。

アウロラや竜人族の集落は、全部俺の魔道具に依存している。

灯りの魔道具に始まり、コンロや、汚物や汚水を分解、浄化する魔道具まで。

これは、深淵の森で薪などを手に入れるのが、俺たち以外には無理だからという理由もある。そんなの本来自殺行為だからな。

ここ以外じゃコンロの魔道具なんて、貴族や豪商じゃないと持っていないが、ここでは必須の魔道具になる。

「ここでの生活は、シグムンド様の魔道具がなければ成り立ちません。灯りの魔道具と下水や汚物の分解、浄化の魔道具は必須でしょう。あとは、宿や食堂にコンロの魔道具は必要だと思います」

「そうだよな。そうなる盗難防止の仕組みも必要になるか」

この草原地帯で人が暮らすには、今のところ魔道具が必要だった。

アウロラや竜人族の集落では、ありがたいことに俺が設置した魔道具を盗もうだなんて考える人はいない。

竜人族の集落では俺が拜まれるくらいだからな。

ただ冒険者用の村となると、盗難防止策を考える必要がある。

宿や食堂、雑貨屋や鍛冶の工房を営む人は別にして、護衛で訪れて利用する冒険者は、全員疑ってかかる必要があるかもしれないな。

「盗難防止に関しては、少し考えてみるよ」

その後、村を造るにあたり、作業員として竜人族からも人を出してくれることになった。

加えて、ダーヴィッド君も、アウロラに駐屯している兵士を交代で派遣してくれるとのことだった。

お手伝いは大歓迎だ。

さて、村一つくらい、サクッと造ってしまおう。

あれこれ話している間に冬になってしまふ。

草原地帯は大陸の南端に位置するので、冬と言ってもそれほど厳しくはないが、寒くないわけじゃないからな。

四話 みんなで工事

草原地帯にそびえる高い城壁が目に入る。

つい最近、俺の気まぐれでアウロラと名付けられた城塞都市から、目と鼻の先の場所に俺は来ていた。

楽しそうな子供の声が聞こえる。

そう、今日はミルやララに加え、孤児院のポーラちゃんも一緒だ。

「わぁーいー！！」

「ミル！ ララ！ 勝手に遠くに行かないのよ！ ポーラちゃんもね！」
「ポーラちゃん！ 待ちなさい！」

街の外に出てテンションが高い子供たちを、ミルとララの母親であるルノーラさんが心配そうに追いかける。

その後ろにはポーラちゃんの付き添いで来ているシスターのアーシアさんもいる。
ミルとララ、ポーラちゃんは、それぞれ猫系の従魔であるクロとシロ、マロンに乗っているの、このあたりにイレギュラーで魔物が出没したとしても平気なだけだな。

アーシアさんも従魔であるグリースを連れている。

グリースは、普段はアイリッシュ・ウルフハウンドっぽい見た目だけど、大きくなると双頭のオルトロスとなる。

まあ、このあたりじゃ番犬としては十二分の実力だ。

はしゃぐ子供たちはルノーラさんとアーシアさんに任せて、俺はセプールたちと村を造ってしまおう。

「旦那様、この範囲で外壁をお願いします」

「了解。……街道を壊さないように気をつけてっと」

セプールから村の範囲をマーキングしてもらう。

俺はその範囲を指定して生えている草を取り除き、平面に押し固める。

その時、既にある街道を壊さないように気をつけながら地面を均す。

そして基礎工事を一瞬で終えると、すぐさま外壁で村を囲った。

「よし。こんなものか」

「はい。十分だと思います」

高さ三メートル、厚さ三十センチの外壁を確認。

セプールからもオツケーをもらったので、次の作業に移るか。

冒険者用の村は、既にある街道が村の中央を走る形で外壁を囲った。

門は東西に二ヶ所。

村の規模としてはそれほど大きくない。

それは普通の村のように、農地などが必要ないからだ。

「えっと、井戸はこのあたりとあそこら辺の三ヶ所でもいいか」

「はい。あとはポンプを設置すれば問題ないと思います」

「森神様。申し訳ないが、この広場にする予定地の近くにもお願いできるか」

俺が地下の水脈を確認しながら、サクサクと井戸を造っていると、冒険者ギルドの支部長グランツからそうお願いされる。

「それは構わないが」

「冒険者がある程度自由に使える水場があると助かるんだ」

「なるほど。ここまで護衛で来る冒険者なら、最低でも安宿には泊まれるだろうけど、宿がいつぱいで野営を強いられる場合もあるかもな」

行き来する商人が増えるだろうとはいえ、それほど多くの人間が滞在することは想定していない。ただ、もし宿がいつぱいで泊まれなかった場合、村の外での野営は危険だ。

「では私は宿の縄張りをしてみます」

「じゃあ、俺はダーヴィッド殿下と相談しながら冒険者ギルドの縄張りをするか」

セブルとグランツが、宿と冒険者ギルドの支部建設予定地へと向かった。

俺はそれを見送りながら、井戸にポンプを取り付ける。

井戸用のガチャポンプは、俺の空間収納の中に売るほどある。

その後、井戸を完成させた俺の所に、ミルとララ、ポーラちゃんが出てきた。

「お兄ちゃん！ ミルもお手伝いする！」

「ララもお家建てする！」

「ポーラもお手伝いできるよ！」

「ミル！ ララ！」

「ちよつとポーラちゃん！」

どうやらお手伝いがしたいらしい。

あとから追いかけてきたルノーラさんとアーシアさんが止めようとするけど、クロやシロ、マロンに乗ったミルたちは止まらない。

ダーヴィッド君たちも、普段からアウロラの街でシロたちに乗る子供たちを見慣れているから驚きはしないし、止めに入るなんて無謀なことほしない。

シロやクロ、マロンも普段はともかく、子供たちが乗っている時は虎よりも大きい姿に変わっている。

それに、魔物のランク的にも魔王国の兵士が束になっても抑えきれるか分からないレベルだからな。

ちなみにアーシアさんの従魔であるグリース。

あいつは子分的な立ち位置らしく、シロやクロ、マロンを怖いとは思ってないらしい。

「そ、そう。なら、お手伝いしてもらおうかな」

「「わぁーいー」」

「シグムンドさん、すいません」

「シグムンド様、ポーラが申し訳ありません」

「いえいえ、魔法の練習と思えばいいんですよ」

子供が大人のお手伝いしたがるってあるよな。

ルノーラさんとアーシアさんが申し訳なさそうに頭を下げるが、これはちょうどいい機会だと考

えよう。

本来なら小さな子供に村造りのお手伝いをさせるなんてあり得ないんだろうけど、ミルとララ、ポーラちゃんなら話は違ってくる。

ミルとララは、魔法に高い適性を持つエルフだ。

ポーラちゃんは人族だが、孤児院の子供の中でも一際レベリングに熱心な子で、魔法の素養も高かった。

それに加えてミルとララは、魔力で繋がる俺の眷属でもある。

セプールやリーファのように血を分けた眷属ほどの規格外の力はないが、それでもエルフという種族の理を超える力を得ていた。

この子たちの場合、普通の子供がお手伝いするのと同じに考えちゃいけない。とはいえ俺のように、何も無いところから創造するのはまだ無理だ。

なので建物の元になる材料が必要になる。

「ダーヴィッド君。雑貨屋の場所と縄張りはできたかな？」

「は、はい！ ここです。地面に線を引き、一応図面も用意しました」

「ありがとう。ミル、ララ、ポーラちゃん、ここに資材を出すから、この図面の通りに造ってみようか」

「任せて！」

「何回もお兄ちゃんが建物建てるの見てるもん！」

「ポーラも頑張るよ！」

「ルノーラさんはサポートお願いします」

「分かりました」

ミルとララは、俺がいろいろと造るのを見ているので、魔法を発動するイメージがしやすいだろう。

攻撃以外にも日常生活の中でいろいろと魔法を使うから、ミルとララもそれが普通だと思っ

ている。セプール曰く、生活の中で魔法を便利にする奴なんてほほいらないらしいけどな。

必要量の資材を積み上げてから、ミルとララとポーラちゃんに、造り方のアドバイスを

「じゃあ壁を一面ずつ造ってみようか」

「はーいー」

子供たちが魔力を制御し、壁を一枚立ち上げる。

俺は歪みや傾きがないよう補佐しながら、立ち上がった壁が倒れないよう強化しておく。

「上手い上手い。この調子で壁を立てていこう」

「でしょー！」

「このくらい簡単だよー！」



「ポーラもできた！」

本人にバレないよう魔法を使ってポーラちゃんのサポートをしつつ、雑貨屋の壁を完成させ、扉部分などは俺が正確にくり抜き、屋根を造る。

ある程度進んだ時点で、俺は助っ人^{すけと}を呼んだ。

『マスター。この建物の仕上げですね』

「トム、わざわざすまないな。窓枠や扉、天井や壁板や床板をお願い」

『了解しました』

元ウッドゴーレムのトム。

今はクラフトマン系に進化し、農業から木工^{もくじょうぎく}細工^{こま}まで熟す、うちの古参組だ。

今回は、建物の中で木材が使われる部分をトムに任せる。

植物魔法が使えるトムなら、木材の扱いなんて自由自在だからな。

トムが合流してから建築スピードは加速した。

「やったー！」

「お兄ちゃん！ つぎ！」

「つぎはどこ？」

俺やルノーラさんがフォローしながらでも、一軒の雑貨屋を完成できたことが嬉^{うれ}しかったみたいだ。

子供たちは次の建物を建てると張り切っている。

「シグムンドさん、本当にすいません」

「いや、これも魔法の練習と思えば、ねっ」

「お兄ちゃん！ 早く早く！」

「はいはい」

流石に宿屋は建物が大きいから任せられない。

それで、竜人族の駐屯用の建物や魔王国の兵士用詰め所、冒険者ギルドの支部を俺やルノーラさんがサポートしながら建てていく。

「そうだ。ダーヴィッド君、グランツ殿、宿屋の窓はガラスを入れるのか、それとも板戸にするのか、どうする？」

「ガラスは贅沢ぜいたくでしょう」

「そうだな。冒険者の宿なんて板戸が普通だ」

宿屋の窓をどうするか、ダーヴィッド君とグランツ支部長に聞いた。

この世界ではガラスは高価なので、普通、宿屋の窓には使われならしい。

「なら高級宿だけガラスにするか。強化の付与ふよをしておけば、そこらの冒険者が攻撃しても割れないだろう」

「草原地帯に護衛で来るレベルの冒険者が攻撃しても割れないガラス窓つても怖いが……森神様

だしな」

「ええ。それでいいと思います」

「了解。じゃあ高級宿の内装はダーヴィッド君、頼むね」

「お任せください。職人は手配済みです」

流石に高級宿に板戸はと思った俺は、そっちはガラス窓にして、少々のことでは割れないよう付与することに。

カーテンや壁紙やベッドや調度品ちやうどひんなどは、事前の打ち合わせ通りダーヴィッド君が手配してくれる。

高級宿の壁が剥むき出しの石つてのがダメなのは俺も分かる。

さて、魔道具を設置していかないとな。

灯りの魔道具は、天井に設置するシーリングライト型。

持ち運びできるタイプだと、その気がなくても出来心できしんでついでにすることがありそうだ。

盗まれないように工夫するつもりだけど、そもそも盗まれにくいようなものを造る、というのも大事だ。

村の規模が小さいから早く終わりそうだな。



冒険者ギルドの支部長であるグランツは、目の前の光景に呆然としていた。

「なあ、ダーヴィッド殿下。幼児が魔法で建物を建ててるんだが、これは魔王国じゃ普通なのか？」
「そんなことあるわけじゃないじゃないですか。魔王国でも魔法は戦いの時に使うだけですよ。それにこんなに繊細な魔法の制御、我が国でもできる者はほとんどいないのではないですかね」

「だ、だよな」

グランツの目の前では、ミルとララ、ポーラの三人が、シグムンドやルノーラが陰からサポートしているとはいえ、魔法だけで立派な建物を形作っている。

それを楽々と熟す魔力量にも驚きだが、正確で繊細な魔法の制御に、開いた口が塞がらない。
「それに殿下や竜人族の長老は平気な顔してるが、あの子たちが乗ったりしてるの、ヤバイ魔物だよな？ あの魔族のシスターが連れているのだって、伝説級の魔物じゃねえのか？」

「ああ、シロちゃんとクロちゃんとマロンちゃんですね。それとシスターのアーシアの従魔のグリース君です。当然、強い子たちですよ。深淵の森をミル嬢たちを乗せて行動できるくらい」

「予想以上にやべえ奴だった」

冒険者ギルドの支部長グランツが、シロたちを見て顔を引き攣らせるのも仕方ない。

それだけのランクの魔物なのだ。

ただ普段からアウロラでよく見ているダーヴィッドや、集落でスパルトイやマザーキラープランツなどと共存している竜人族の長老からすれば、どうってことはない。

そもそも長老は信仰対象の黄金竜がアウロラにいることを知っているのだ。

高ランクの魔物程度と、感覚がおかしくなっていた。

グランツも竜人族の集落を通過した時によく観察していれば、そのヤバさに冷や汗が止まらなかつただろう。

だが、疲れていたグランツはその時、馬車の中でぐっすり眠っていて気付かなかつたのだ。

「支部長。シグムンド殿の眷属は基本、我々の手に負えない存在ばかりですよ。深淵の森の主人といるのはそういうことです」

「……あ、ああ、そうだったな。古竜が暮らす街だった。それに、その古竜に頼られるのが森神様だったな」

改めてシグムンドのヤバさを理解したグランツ。

ダーヴィッドに関しては、最初に草原地帯に来た時、グレートタイラントアシユラベアのアスラにビビらせている。

それで、あとは少々なことでもシグムンドだから仕方ないと、無理矢理納得できるようになっていた。

グランツは深淵の森素材の取り引きという重要案件を任されている。彼は基本的にアウロラの合同買取所に常駐し、冒険者用の村の支部も統括する。

それで、のちに他の支部へと仕事で向かう際、竜人族の集落の発展した現状を見て、顎が外れるほど嘔然としてしまうのは少し先の話。

五話 増える行き来

俺——シグムンドたちの手で冒険者用の村が完成したが、今はまだ準備段階だ。

ダーヴィッド君が魔王国へ、新たに草原地帯に派遣する兵士の要請を出したり、冒険者ギルドの支部長グランツが、村に造った冒険者ギルド支部で働く職員の人選をしたり、竜人族の長老が魔王国にある各集落から追加の人員を要請したり。

それに加えて、宿を任せるリタイアした冒険者のスカウトもだな。

お陰でこのところ森の拠点から、ほぼ毎日アウロラに通っている。

ミルとララは、孤児院のお友達と遊べるから喜んでいるけどね。

今日はアウロラの城の周辺をどうするか、セブルと相談しながら実際に見て回っている。

アウロラから東側に農地が広がっているのだが、そこに移住してきた人たちの生活も安定してきた。

アウロラから東側へは一本の道が真っすぐに延びていて、俺が調子に乗って岩山ごと造った城がそびえている。

以前に一度、草原地帯を縄張りとする騎馬民族っぽい蛮族たちが、城を我が物にしようと襲撃してきたこともあった。

だけど今ではそんな奴らはいなくなった。

草原地帯で真面目に暮らしていた遊牧民は、現在ではアウロラかその東側の農地に定住し、それを襲うような蛮族どもは、この草原地帯で生きていけなくなったと言える。

そんなバカたちは、西方諸国連合へと流れて盗賊行為を続ける者と、執拗にアウロラや東側の農地区画を襲おうとするバカに分かれたようだったが、どちらも辿る運命は一緒だったみたいだな。

「城なあゝ。無駄に立派に造っちゃったから、このまま放置ももつたいないしな」

「現状、旦那様の眷属である、ゴレムしかいませんから、もつたいないと言われればその通りかと」

「だよなあ」

岩山へは正面から九十九折りの階段で上るが、大変だろうから北側にエレベーターまで設置して

ある。

セブル、リーファは飛ばばいいし、それこそ俺は転移すれば一瞬だけど、眷属であるゴーレムたちのためにエレベーターを設置してあるんだ。

まあ、ゴーレムだから階段を上つても疲れないんだけどな。

この城を今すぐにどうこうする必要もない。

ただ、アウロラまで足を運ぶ商人が増えると、当然そこから東側に見える城が気になると思うんだよな。

調子に乗って岩山の城なんて造らなけりゃよかった。

高さがあるから目立つんだよな。

「アウロラの街からは、よく見えますから」

「そこまで近くはないんだけど」

「大きな岩山の上にそびえ建っていますので」

街から岩山の城までは、約三十キロメートル。

道も俺がキレイに整備してあるので、遠いっていう距離でもない。

しかも、この世界の人って視力がいいんだよな。

城のことを知っている住民やダーヴィッド君たちは別にして、初めて訪れた人なんかは間違いない。「あの城は何だ」と騒ぐことになる。

「将来的には、あの城を中心に都市を建設するのも面白いでしょうが、旦那様的にはこれ以上アウロラ周辺に有象無象が寄り付くのは避けたいのですね？」

「まあ、竜人族と茶葉を交易したり、魔王国や商業ギルドを除く各ギルドと森の素材を取り引きしたり、多少人の行き来が増えるのは仕方ないと思うよ」

「そのために冒険者用の村まで造りましたからね」

無秩序に住民を増やすつもりなんてサラサラない。

今の住民が、困窮する親類や知り合いを呼びたいって話もあるから、少しずつ増えてはいるんだけどな。

もともと孤児院を造りたいってのからスタートした城塞都市とかその他諸々だし、貧困国からの移住者なんかも受け入れたから、強欲な奴らや悪意ある奴らは入れたくないんだよな。

まあ、そうは言っても集まってくるのが、そんな奴らなんだけどな。

ほんとハエみたいな奴らだよ。

「アウロラから徐々に、本当に少しずつ東へ開発するくらいか」

「それが無難ですな。アスラに東側の巡回を強化するよう伝えておきます」

深淵の森でもトップクラスの実力を持つアスラが、草原地帯を巡回するだけで、ほとんどの魔物は近付かない。

ただ、虫系の魔物は食欲なんかの本能が強いらななのか、匂いや気配で魔物を避けることは少な

いんだよな。

「ああ、頼む。森と草原地帯の境界に、何か工夫が必要かな」

「虫ども対策ですな」

「ああ。本能が強いなら、虫除けの魔道具なんて作れないかな」

「可能性はありますな」

森から出てくる魔物を結界で防ぐことは可能だろう。

ただ、俺の眷属以外を全て通れなくするつてのもまずい。

孤児院の子供たちは眷属じゃないから通れなくなる。

現状、森での子供たちへのパワーレベリングは必要だからな。

本当は、そんなことしなくても平和に暮らせる環境になるといいんだが、今のところ道は険しうだ。

虫系のみ^まに効く虫除けのような魔道具なら作れる可能性は高い。

本能が勝ちがちな虫系だけに、嫌な臭いや波長^{はちよう}、魔力を発する道具で、草原地帯に近寄らないようにできるかもしれない。

「いろいろと実験してみるか。成功したら農地区画の安全性も高くなるしな」

「そうですね。もともと魔力濃度の高い場所に棲息^{せいそく}する魔物は、餌^{えさ}でもない限り草原地帯に出て来ることは少ないですから。嫌なモノを我慢^{がまん}してまで近寄らないでしょう」

「簡単な虫除けでも効果があったら、錬金術師や薬師の仕事にできそうだしな」

「おお！ それはいいアイデアですな」

多分、深淵の森なら虫除けになる草や花もあるだろう。

それを使って、魔道具じゃなくても、シンプルに虫除けも作れるかもしれないな。

それなら錬金術師や薬師でも作れるだろう。

ところで、冒険者用の村に造った宿屋や雑貨屋、鍛冶の工房で働く者は思いのほか早く見つけた。

ダーヴィッド君や冒険者ギルドの支部長グランツが頑張ってくれた。

宿屋で働く元冒険者と下働きは、グランツ支部長が慎重^{しんちょう}に人選をしたこともあり、セブルのお眼鏡^{めがね}にも適ったようだ。

鍛冶の工房を任せる職人には、なんとドワーフの鍛冶師夫婦^{ふうふ}が手を挙げたという。

頑固^{がんこ}だが人柄は間違いないらしい。

まあ、エルフがいるんだからドワーフもいるか。

治安維持に関しては、俺がアイアンゴーレムを二体派遣した。

加えて、竜人族の長老から派遣されたメンバート、ダーヴィッド君が魔王国の武官長^{ぶくわんちやう}イギリスに連絡し、急遽^{きゅうそん}選出し派遣された者たちと力を合わせてあたる。